山と花のたより　156号

２０１２年８月１５日　松尾忠
メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
http://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com

花の白峰三山縦走　オオヤマレンゲ山の会　第324回例会

２０１２年７月１６日（月）～１９日（木）で北岳を盟主とする白峰三山を縦走した。参加者は７名《松尾・稲毛・松下・寺前・松並・木目・道中公》　**以下の文は道中さんの「記録」から拝借しました。**

１６日（曇り）八木６：２９発近鉄特急で名古屋へ。ＪＲ中央線で塩尻→上諏訪→甲府。ジャンボタクシーで登山口広河原へ。

１４：３０　野呂川を渡って広河原山荘の横から登り始める。‘白根御池小屋’まで高度差７００ｍの登りだ。　**コイワカガミ→**

１６：４５小屋着。標高２２００ｍ。小屋の名前のいわれとなる池があって、黒いオタマジャクシが泳いでいる。周囲には花が咲いている。特に“ﾐﾔﾏﾊﾅｼﾉﾌﾞ”の優雅なたたずまい、葉の形状に違いのある“ﾂﾏﾄﾘｿｳ”と“ｻﾝﾘﾝｿｳ”など。１９時ごろには雲が晴れ、小屋の前から見上げる位置に北岳がそびえている。やがて細い月や星が東の梢にかかる頃、山頂の黒々としたあたり神が宿るにふさわしく思われる。小屋には乾燥室があり、濡れた衣類を乾かすことができる。登山靴は、袋に入れて部屋まで持って入る。７名が一つの部屋で足を合わせて寝る。水も豊富にあって清潔。

←ミヤマハナシノブ

１７日（晴れ）**５：２０**発。昨日見上げた‘草すべり’を登る。（横には雪渓が長々と残っていた）“オオﾋｮｳﾀﾝﾎﾞｸ”“ﾐﾈｻﾞｸﾗ”“ﾊｸｻﾝﾁﾄﾞﾘ”などまことに美しい。「空気も薄くなってきた！これからはエラ呼吸もせな！」と笑いをふりまく人あり。二上山に次ぐ今回の山行きとなった寺前さんは「真下に御池が見える、いかに直登を我らは登っているか、二上山では太刀打ちできないな」と言う。　**シナノキンバイ→**

２７００ｍハイマツ帯の下に“ｲﾜｳﾒ”“ﾐﾈｽﾞｵｳ”“ｱｵﾉﾂｶﾞｻﾞｸﾗ”高山植物の一角に網のネットが張られている。「餌を探して猿や鹿も高い所に現れるようになった」松尾さんは淋しげ。このあたりから丈１０～１５ｃｍの“ﾊｸｻﾝｲﾁｹﾞ”の白、“ｼﾅﾉｷﾝﾊﾞｲ”の黄色がめだつ。

下　イワウメ

７：３０小太郎尾根に上がる。すると真っ青な富士が現れる。固唾をのんで７名は見入る。誠に美しい稜線でもって空との境界となす。ずう―と下の雲海から泡のように雲が湧き上がっていたが、３筋ほど雪で化粧した富士は雲さえも寄せ付けない、そんな構図に見える。

尾根を歩きだすと、足元の植物は“ﾖﾂﾊﾞｼｵｶﾞﾏ”“ﾀｶﾈﾔﾊｽﾞﾊﾊｺ”“ｷﾊﾞﾅﾉｺﾏﾉﾂﾒ”と珍しく、又、仙丈ケ岳、甲斐駒ケ岳など名だたる名峰とも対面する。
カヤクグリという小鳥を見かける（一妻二夫とか）
　見上げると、重いリュックを背に寺前さん・陽子さんらは岩をよじ登っている。空に向かう心地と緊張感がしばらく続く。

８：４５肩の小屋で一息。金糸卵のような“ﾔﾂｶﾞﾀｹﾀﾝﾎﾟﾎﾟ”が咲いている。
９：３５　北岳頂上（３１９３ｍ）三等三角点(白根岳として設置)稲毛さんが一人ずつ記念写真を撮って下さる。白や黄の花に囲まれ南面には這松もある。この時風もなく穏やかな頂上だった。もちろん富士の頂から左右に流れる線の飽きることのない美しさ、一点の陰りもなく曳かれている。

上チョウノスケソウ

北岳肩の小屋への道

１１：３０赤い屋根の**北岳山荘**に着く。二部屋に分かれて荷物を置く。小屋の裏にはまだ雪渓が残っていて、その横でお弁当にする。
１２：３０～１４：００この間“八本歯のコル”を目指すルートを幻の“ｷﾀﾀﾞｹｿｳ”を探して散策する。随分歩いてもう諦めかかった頃に、松下さんが「これではなかろうか？」、女性が「それは白山一華のようね？」と首をかしげたが、野菜作りの達人らしく松下さんは「それでもこれ見比べたら葉っぱが違う」と。本当に葉が違う。おおいに皆は納得。同時にやっと見つけた北岳草に興奮と満足を覚える。そこにはよく似た“ﾊｸｻﾝｲﾁｹﾞ”と“ﾁｮｳﾉｽｹｿｳ”が混ざるように咲いている。
　この日、昼間の高揚した気分のまま夕食となり、赤くなるほどお酒も進む吾人となる。

←キタダケソウ

１９時頃が日の入りと聞き、**１８：２０**山荘の尾根に出る。だんだんに沈む西の空の夕焼けを、東に鎮座する富士が受けて、それとなくピンク色に染まっていく。「赤富士が見れる」と誰かが言うが、日没と共に富士は薄墨で描いたようになった。
この夜もまた慣れない床の中、ごーごーとなる風の音を聞きつつ夜明けを迎える。
　17 日（晴れ）風音も和らぎ、窓いっぱいに長い裾を持つ富士が見えている。空気が動いているのか富士の周りからいろんな形の雲が立ちあがっていく。
５：１０小屋を後にしてゆっくりと出発する。

下　ハクサンイチゲ

上　間の岳に向かう

今朝は風が強い。伊那谷は雲海に覆われ、その向こうに中央アルプスそして北アルプスの槍ケ岳までよく見える。松下さん「やりきれん！」（皆笑う）、松尾さん「座布団何枚かな？」陽子さん「三枚は上げます」

北岳を通り過ぎて後、寺前さん「花は確かにきれかったわ！」。松尾さん振り返って「北岳は、何処から見てもかっこいいなー(^.^)」

中白峰（３０５５ｍ）を越えて、稜線は緩やかに見える。次なる間ノ岳に手招きされているようで、吸い寄せられる歩みとなっていく。

６：５５　間ノ岳（３１８９ｍ）三等三角点（相ノ岳として設置）山頂の形は穏やかな曲線で描かれているのに対し、後ろになった北岳は鋭く厳しい姿の三角錐。抜ける様な青の世界を見渡せば、あまたの名峰が東西南北にどっかりと居を構える。

８：２０農鳥小屋

９：４５　西農鳥岳（３０５１ｍ）稜線上にこぶのようになった岩の上。頂上には何の標識もなく、７名の合議で地図など広げ「ここに違いない！」と決めて写真も撮る。

１０：２５　農鳥岳（３０２５ｍ）皆でカメラの前に立てば、後ろに間ノ岳・北岳と並んで納まった。ここでお弁当。このころ雲は、だっこするように富士を包みだす。

君子さん「真綿のショールを富士さんがかぶっているよ（*^_^*)」

間ノ岳から農鳥岳の途中雪渓上を４回ほど歩く。前の足跡に足を置いて行くが、それでも滑りだしたら止まらない。身体を低くして雪が無くなった所で止まった、ヤレヤレ

１０：５０これから“大門沢下降点”まで下る。北岳ともいよいよお別れです。急な下りを、寺前さんの所望で俳句を作りつつ、又、雷鳥が現れる事を期待して這松に視線を送りながら行く。松下さんが良い目で探して下さったが、結局お天気が良すぎて雷鳥には会えず。陽子さんが創ってくださった歌の記録をとっていなかった(>_<)　思い出せない。

１１：３０下降点にリュックを縛って置く。強風の中広河内岳へと進む。

１２：００　広河内岳（２８９５ｍ）松尾さんを中に「万歳―」と手を上げてみれば、数々の山も含め達成感に包まれる。元来た道を引き返す。

上　ツガザクラ

ハクサンシャクナゲ

下ミヤマキンバイ

肩の小屋からの富士

１２：３０さあーこれからは“大門沢小屋”まで約１０００ｍの下り。松尾さん「ここを下るのは３回目、最初は小学生だった息子と娘を連れて。子どもたちがドンドン走り下って小屋にも泊まらずそのまま奈良まで帰った。僕も今みたいに老いぼれていなかったからついて降りたけど」と思い出される。

１５：３０大門沢小屋着。谷間を見下ろす位置にあって、開けた逆三角形の空に富士山が座っている。１回４分間のシャワーを浴びて、それに３日目ともなればさすがに疲れてよく眠れると思ったけれど、部屋の居心地がなんともかとも.o〇

松尾さん「前回オオヤマレンゲの例会でここに泊まった時にはあの二階が貸し切りだった」と。何年前のことかしら？二階を見上げて先輩会員の若返った姿を想像する。

上　シコタンソウ

上ミヤマシオガマ

１８日（晴れ）　小屋で働くお二人が４時に起きてきて、ランプの光で朝食の準備を始める。谷の水を引いた桶には、ビール缶が浸かったままになっている。

４：３０暗い電気が灯されて、泊まり客は身支度を始める。

５時朝食｛海苔・生卵・ちりめんじゃこ・たくあん・味噌汁（ワカメ・豆腐）・ご飯・お茶｝

５：４５から“奈良田温泉”まで１０００ｍを下る。時々の休憩には、貴重な非常食を頂きながら、小屋で汲んだ水を飲む。木々を見上げた松並さん「緑が優しい♡」深い森の中である。大門沢の谷川を何度も渡りながら、それはグラグラするような木の梯子だったり、綱を持って渡るような不安定な架け橋。少しでも安心して渡れるように、松下さんや稲毛さんは流れ木を添えたり、ロープをピーンと引っ張ってくださる。有難いことに無事通過する。

水っぽい岩の側に黄色の“ﾀﾏｶﾞﾜﾎﾄﾄｷﾞｽ”（綺麗！）その近くに“ｲﾜﾀﾊﾞｺ”何度も見かけた猛毒の“ﾀｹﾆｸﾞｻ”等山の上とは異なる植物に会う。

８：１５“登山道入り口”に下りたつ。ここからは足元を余り気にしなくてよい林道を歩く。

９：４０孝謙天皇が温泉で療養され

下　北岳山荘付近から北岳を振り返る

たと説明のある**奈良田温泉着**。お風呂に入って食事も取り、心身共に爽やかとなりいよいよ奈良に帰る。温泉から下って５分、そこに身延駅に向かうバス停がある。温泉で買った桃を冷やして、歩きながら皮をむいて「さぁ、食べましょう」

上　ミヤマオダマキ　　その時、寺前さんの手元が！「あっー」大きな声が飛び出した。指さす方に剝いたばかりの桃が無傷で草の上にポッコリ落ちる。拾った桃に水をかけ、見ていた皆が「大丈夫！」と言う。

１３：５５発のバスに乗って、“身延駅”へ。１５：３２発の JR に乗る。静岡から新幹線を利用して、名古屋で再び近鉄に乗り換える。７名がそれぞれ近くに座った時、今回の山行きを振り返り、反省の機会とする。出発点の八木駅に着いたのは２０：１９。解散。

追伸：山行きは天候に大きく左右されると聞きますが、今回その天候には大変恵まれました。その上、素晴らしい先達に見守られて、参加者は思い思いに十分山を楽しみつつ、目的を達成することができましたこと深くお礼申します。

《この１５６号の文章は、オオヤマレンゲ山の会の例会記録として道中さんがまとめられたものですが、会と道中さんの了解を得て、ここに転載するに当たり修正しています。従って文責は松尾にあります》

下　八本歯のコル付近から間の岳を望む　　**右バイカウツギ**